

21. 信仰の忍耐

ペテロの手紙#21

<https://ichthys.com/Pet21.htm>

ロバート・D・ルギンビル博士著

第一ペテロ 1 章 3-5 節の＜イクシス＞訳：

私たちの主イエス・キリストの父なる神がほめたたえられますように。神は、その大きなあわれみによって、私たちをイエス・キリストの復活によって生ける希望に生まれ変わらせ、朽ち果てることも、汚されることも、消えることもない相続財産を受け継がせてくださいました。この相続財産は、私たちのために天に保管されており、私たち自身も神の力と神への信仰によって守られ、終わりの時に明らかにされる究極の解放へと備えられています。

序論と復習： 第一ペテロ 1 章 3-5 節における中心的な主題は、私たちがキリスト者として「新しく生まれた」ということです。この劇的な新生は、私たちとこの世との関わり方を根本的に変えてしまう新しい関係性の中へと、私たちを導き入れました。ペテロは、三つの重要な変化を挙げています。それぞれはギリシヤ語の前置詞 *eis*（～へ、～に）によって導入されており、私たちが新しく入れられた三つの祝福を指しています。それは「生ける希望」「朽ちない資産」「最終的な救い」です。これら三つは、私たちの主であり救い主であるイエス・キリストの再臨の後に実現する、栄光に満ちた現実を指しています。神の目に「新しく生まれた者」とされている私たちの新しい命は、魂の中に据えられた錨のようなものであり、やがて明らかにされる天の現実としっかり結びついています。「生ける希望」「朽ちない資産」「最終的な救い」という三つの祝福はすべて、イエス・キリストに対する信仰を通して神の恵みによって新しく生まれた私たちの命の特徴です。そしてそれぞれは、キリスト者の三大徳である信仰・希望・愛のいずれかに対応しています。

生ける希望： まず第一に、私たちは「イエス・キリストの死者の中からの復活を通して、生ける希望へと新しく生まれた」のです。この「生ける希望」とは、私たちの体の復活を意味します。すなわち、欠陥のある地上の器が、栄光に満ちた永遠の住まいへと変えられることです。今は神の目において地位的にこの永遠の命をすでに持っていますが、そのすべての栄光を体験するのはキリストの再臨の時です。希望という徳は、この祝福された最終的な現実には私たちの確信を完全に向けさせ、朽ちゆく肉体とこの世の

失望を耐え忍ぶ力を与えます。

朽ちない相続財産：次に、私たちは「決して滅びず、汚されず、色あせることのない相続財産へと新しく生まれた」とあります。この「朽ちない相続財産」とは、キリストの裁きの座において、すべての信者が自らの地上での行いに基づいて受け取る報いを指しています(新しい契約に基づくものです。参照：[ヘブル 9 章 15-16 節](#))。これらの報いは永遠のものであり、悪魔が支配するこの地上で私たちが得るどんな良いものともまったく異なります。イスラエルの民が何世代にもわたって放浪の終わりと、神が約束された地への栄光ある入国を待ち望んだように、私たちもまた、キリストの御後に従って天の御国に入り、この世での労苦の実りを刈り取る日を心から待ち望んでいます。この新しい誕生の側面には、愛の徳が対応します。というのも、キリストにおいて示された神の人類への愛を、私たちが自らの歩みと奉仕を通して反映させるとき、私たちはその愛のゆえに報いを受けるからです。この世の利益とは異なり、永遠の報いは朽ちることがありません。それらは「滅びず、汚されず、色あせることがない」ものであり、いかなる損傷も減少も受けることなく、盗人が入り込むことも、虫が食うこともありません。これらの報い(私たちがこの生涯で主への愛を実践した結果を反映するもの)は、この世の厳しい努力や競争によって得られるのではなく、恵み深い神の惜しみない寛大さに基づいて与えられるものです。

(参照：[ペテロ#18](#), [来たる艱難期第六部](#)も参照)。

最終的な救い：第三に、私たちは救いの確証を持っています。すなわち、キリストを信じる者として「神の力と神への信仰によって守られており、終わりの時に現される救いに至る」のです。この「最終的な救い」とは、歴史の終わりにおいて、個々の信者に対して神が約束されたことの成就を指します。私たちは文字通り、歴史の最後に「裁きの火から救い出される」ことになるのです。ペテロは聞き手がすでに「終末」に関する基本的な事柄を理解しているものとして、この救いを語っています。そして、この救いは主イエス・キリストへの継続的な信仰に依存しています。復活こそ、この聖書の約束が成就する時点です。したがって、その救いが実際に起こる時と状況は、キリストの再臨によって区切られる次の二つの復活の段階に応じて異なります。しかし、私たちが新しい体を持って主の御前に立つとき、その目的は私たちの「救い」を吟味するためではありません。むしろ、私たちの生涯における奉仕を評価するためなのです([第一コリント 3 章 15 節](#))。そして、「生ける希望」が復活を指し、「朽ちない資産」が愛という徳と結びついてるように、この「最終的な救い」は信仰という徳と切り離すことができません。私たちは「神の力と私たちの信仰によって守られている」と、[第一ペテロ 1 章 5 節](#)に記されています。神の力が揺らぐことは決してありません。しかし、人間の弱さを考えると、この点

——すなわち救いの確証が信仰に依存しているという事実——については、十分に注意を払う必要があります。すでに[ペテロ#18](#) で学んだように、「栄光の冠」は、信仰と希望を具体的かつ正当な奉仕によって裏づけ、他のクリスチャンの救いと成長に貢献した信者に与えられる報いです。「命の冠」は、試練・迫害・苦難のただ中でも信仰に従って歩み、自分の人生をその信仰と一致させる信者に与えられます。「義の冠」は、この生涯において霊的成熟に到達したすべての信者に与えられる報いです。ですから、これから取り上げるのは、信仰を「失う」と「保つ」ことに関する教えです。

信仰を守ること： 信仰は、キリスト教徒にとって欠かすことのできない徳目です。私たちはイエス・キリストへの信仰によってクリスチャンとなり、またクリスチャンであり続けます。信仰は私たちの「心の目」を形づくります。私たちがクリスチャンになったとき、信仰は手を伸ばし、イエス・キリストの良き知らせを受け取りました。知性によってでもなく、科学的な実験によってでもなく、信じるという行為、すなわち信仰によって、私たちは福音を受け入れ、イエス・キリストを信じました。神が私たち個人に対して福音を「証明」してくださるのを待ったのではなく、証拠なしに、目で見ることなしに、私たちは神の御言葉と約束に信頼を置いたのです。神が聖書の中で語られたこと、すなわちイエス・キリストを信じる信仰によって私たちは世とともに滅びることなく、永遠の命を得る、ということ信じました。神はその約束を与え、私たちはそれを信じました。私たちは神を信頼しました。神の誠実さと御性質を信じ、約束されたことを必ず公平かつ正義をもって成し遂げてくださると信じました。なぜなら神は神であられるからです。その御子イエス・キリストの犠牲のゆえに、聖書の膨大な証言のゆえに、そして私たちの日常の経験の中においても、信仰の目によって私たちは今、聖霊がかつて私たちに示してくださったことを見るのです。すなわち、神は信頼に値するお方であり、頼るに足るお方であるということです。神はこれまで一度も私たちが失望させたことがなく、これからも決して失望させることはありません。御子を信じるすべての者は神の子どもです。彼らは世とともに滅びることはありません。私たちは、物理的な目に何が映ろうとも、神の力強い守りのゆえに確かに安全なのです。私たちは実際に「神の力によって守られている」のです——そして「信仰によって」も守られています。[第一ペテロ 1 章 5 節](#)でペテロが思い起こさせるように、私たちが望み、期待する「最終的な救い」は、依然として信仰にかかっているのです。誤解してはいけません。信仰は私たちの意志に委ねられており、功績によるものではなく、物質的・金銭的投資によるものでもなく、知的な発展によるものでもありません。それでもなお、絶対的に不可欠なのです。信仰がなければ、私たちはクリスチャンではありません。聖書においてクリスチャンとは「信じる者たち」と定義されているからです([ローマ 3 章 22 節](#)など)。

救いの保証： ピリピの看守が自らの救いの必要性を悟らされたとき、彼はパウロとシラ

スに非常に率直に尋ねました。「先生方、救われるためには、私は何をしなければなりませんか」。すると彼らは同じく率直に答えました。「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも、あなたの家の者も救われます」([使徒 16 章 30-31 節](#))。この議論の冒頭で(信仰へのさまざまな攻撃と信仰を守る必要性について詳しく述べる前に)、覚えておくべき大切なことがあります。それは、キリストに対する信仰とそれがもたらす救いは非常にシンプルであるということです。シンプルであるというのは、救いが比較的「私たちにとって」容易に与えられる(なぜならキリストが代価を払ってくださったから)という意味であり、また、神がすべての信者に望んでおられるのは、生涯を通して信仰を持ち続け、最初にキリストを信じたその信仰によって得られた救いに到達することだ、という意味でもあります。ですから、私たちは自分の救いについて過度に不安になる必要はありません。自分自身に問いかければよいのです——私はイエス・キリストを信じているだろうか？ 私は本当に主の弟子なのだろうか？ これがパウロの言う「自分自身を吟味して、信仰に生きているかどうかを確かめなさい」([第二コリント 13 章 5 節](#))の意味です。また、クリスチャン生活において信仰が試されることがないなどと考えるべきではありません。時には非常に厳しく試されることさえあるのです。実際、私たちが今まさに学んでいるこの手紙の著者(ペテロ)自身が、かつて主を三度否んだことがありますが、その後回復したのです。そして回復した彼は、その後、歴史上最も偉大な信仰者の一人となりました。信仰は試されることによってしか強められないのです。このことをペテロはよく知っていました([第一ペテロ 1 章 6-9 節](#))。

信仰：信仰とは「信頼すること」です。私たちが「イエス・キリストを信じます」と言うとき、それは、私たちがイエスご自身と、そのイエスについて父なる神が証しされたことに、自分の信頼をゆだねたということを意味します。私たちは、神と神の言葉を信頼します。すなわち——キリストこそメシアであり、この世に来て、罪と滅びから私たちを救うために来られた方であること、その働きは父なる神の満足のうちに完全に成し遂げられたこと、そして、キリストが私たちの代わりに十字架の上で死なれたその御業によって、本来ならばどうしようもなく滅びるはずだった私たちが、キリストを信じる信仰によって救われたことを信頼するのです。私たちが長い人類の歴史の中で最も古い敵——死——に直面するとき、私たちの経験のすべてが、そして目に見えるすべてが「希望はない」「死が終わりだ」と告げます。しかしそのときこそ、私たちは目ではなく、神を信じるのです。神が私たちに与えてくださった「信仰」という力によって歩み、この世——悪魔の支配する世界——しか見えない「視覚」に頼らずに進むのです。信仰のまなざしだけが、この現世の天幕のかなたを見通すことができます。信仰によって、私たちは次のことを信じます——神は死に打ち勝たれたこと、神はご自分のひとり子を犠牲にして私たちの罪をあがなわれたこと、そしてその御子イエス・キリストを死者の中からよみがえらせ、同じように私たちをもよみがえらせてくださることを。ただ、私たちが神を信じ、ただ、神

に信頼するならば。

信仰は「一度きりの出来事」ではありません。多くの信者が「初めて信じた時の感動の瞬間」を大切に覚えているのは確かです。しかし、私たちの多くにとって、信仰とは次第に育っていくものです——種をまく人のたとえの種のように——ある日、自分が本当に神を信頼していることに気づくようになるのです。世の中が絶望しか見いだせないところで、私たちは信仰の目によって永遠のいのちという現実を見ます。神の御子イエス・キリストにある永遠のいのちの約束を、思い出せるはっきりとした瞬間に意識的に受け入れた人もいれば、その奇跡がいつ、どのように起こったのかを明確に覚えていない人もいます。しかし、どちらの場合であっても、神の言葉を信頼し、死を越えたいのちのためにイエス・キリストに信仰を置いた私たちは皆、同じように神の家族の一員です。私たちは信仰によってこの世を生き抜き、信仰によって次の世界を待ち望む者なのです。

信仰には献身が伴います。どのクリスチャンも証言できるように、キリストに信仰を置いたからといって、この地上での人生が容易になるわけではありません。どのようにしてそうなれるでしょうか。キリストは、「自分の十字架を負ってわたしに従いなさい」([マタイ 16 章 24 節](#))という命令によって、犠牲の人生が待っていることを私たちに明確に示されました。建築者が建てる前に費用を計算しなければならないように([ルカ 14 章 28 節](#))、私たち一人ひとりも、キリストに従う人生が困難なしではないことを最初から理解していなければなりません([第一ペテロ 4 章 12 節](#))。クリスチャンとして、私たちは人間共通の試練や誘惑に加えて、私たち全体の敵である悪魔とその手下たちの積極的な敵対にも直面します([第一ペテロ 5 章 8 節](#))。種をまく人のたとえは、イエス・キリストの福音を聞いたすべての人が天の御国に入るわけではないことを明らかにしています([マタイ 13 章 18-23 節](#))。このたとえ(すでに[ペテロ#12](#), [#13](#)で詳しく学んだもの)は、キリストの招きに対する四つの反応を示しています。1)ある人々はみことばを聞いても信じません(道ばたに落ちた種)。2)ある人々は喜んで福音を受け入れますが、後に離れてしまいます(岩地に落ちた種)。3)ある人々はこの世の心配や欲望に気を取られます(いばらの中に落ちた種)。4)そして、みことばを聞いて積極的に応答し、主のために三十倍、六十倍、百倍の実を結ぶ人々がいます。第三の人々——いばらの中に落ちた種——の解釈は、ここで特に難しいものです。この種は「信仰の芽」を出しますが、マタイが述べるように、「実を結ぶまでには至らない」のです。第四の人々は確実に天の御国に入る信者であり、第一の人々はサタンに妨げられて信じるに至らないことが明言されています。一方、第2の人々は信仰の歩みの中で「つまずく」か、ルカの言葉を借りれば([ルカ 8 章 13 節](#))、「離れ去る」者たちです(この「離れる」を意味する動詞 アフィステーミ(ἀφίστημι /aphistēmi)は、「背教(apostasy)」という語の

語根でもあります)。しかし、第三の人々については問題が残ります。三つの福音書すべての記述で示されているのは、彼らがこの世の心配や快樂に気を取られ、実を結ばないということだけです。前に見たように([ペテロ#18](#))、真の信者が生涯を通してまったく何の実も結ばないということはありません([ヤコブ 2 章 26 節](#))。このたとえの描写は、成熟に達せず、主のためにほとんど、あるいはまったく実を結ばない信者を明確に示しており、私たちに深く考えさせるものです。ここで描かれている人々が、この世でキリストのために無力で、彼らの無価値な行いがキリストの裁きの座で焼かれる信者([第一コリント 3 章 12-15 節](#))に相当する可能性もあります。しかしまた、もともと信じたものの、自らの欲望や関心によって神の計画から完全にそれてしまい、信仰という植物が最終的に枯れてしまう元信者を指している可能性もあります。どちらであっても、信仰が「いばらにふさがれる」第三の人々は、信者全員に対する明確な警告です——信仰を守り続けなさい、と。最も妥当な理解は、この第三の人々の中には、信仰が弱く実を結ばない信者と、信仰を失った元信者の両方が含まれているというものです。どの解釈を取るにせよ、このたとえが示す警告は一つです——「いばらの中の信者」として数えられることは、安全でも健全でもないということです。これまでも見てきた通り、そして今後見るように、靈的に安全な道はただ一つ——靈的成長の道だけです。キリストにあって成長するためには、私たちはキリストに従うという決意に立たなければなりません。

信仰とは、誰か、または何かを信じることです。信仰には対象があり、その行為における価値は、信じる者の中にではなく、信仰の対象そのもののの中にあります。私たちは神を信じます。なぜなら、神は信頼に値する方だからです。神は御子と御言葉を通してご自身を現され、私たちが信仰を向けることのできる具体的な対象を示されました。神は私たちに信じることを命じ、信じるための時と支えと機会、そして動機を与え、さらに最も崇高な信仰の対象——すなわち私たちの代わりに死に、私たちの罪のために死に、私たちが永遠に共に生きることができるよう死なれた御子イエス・キリスト——を私たちの前に示されました。信仰は、その対象なしには存在しません。神なしに、御言葉なしに、また神の正確な姿であり御言葉の具現であるイエス・キリスト([ヘブル 1 章 1-4 節](#))なしには、信じるということ自体が不可能なのです。もし信仰がこの対象を中心としていないなら、それはもはや信仰ではありません。

ですから、信仰は私たちに残された唯一の道なのです。私たちが信仰にとどまり、神とその御子イエス・キリストに信頼し続ける限り、私たちは神の力と自らの信仰によって、時の終わりに現される究極の救いへと安全に守られるのです([第一ペテロ 1 章 5 節](#))。いかなる代償を払っても、私たちは「信じ続ける」ことをやめてはなりません。なぜなら、不信仰の結果はあまりにも恐ろしいからです。

永遠の保障： 信者である私たちは、神によって「守られ」、この不信仰な世に降りかかる裁きと滅びから「救い出される」という聖書の真理があります。これは福音派の間でしばしば「永遠の保障 (eternal security)」という教義として知られています。この呼び方自体には問題はありませんが、この言葉はしばしば、「一度イエス・キリストを信じたならば、その人の天国での地位はその後どんなことが起ころうとも永遠に安全である」という意味に受け取られてきました。この見方では、重大な罪、他の信者や信仰への敵意、さらにはキリストの明白な否認さえも、何ひとつ神の愛からその人を引き離すことはできない([ローマ 8 章 39 節](#))とされます。言い換えれば、「一度救われた者は、永遠に救われている (once saved, always saved)」という考え方です。

しかし、この極端な見解には問題があります。というのも、これは神のご性質と神の義を無視しているからです。神は愛です([第一ヨハネ 4 章 8 節](#))。そして、神がそのひとり子イエス・キリストを世に送り、すべての人のために死なせたのは、神がこの世を愛されたからです([ヨハネ 3 章 16 節](#))。しかし、すべての人が救われるわけではありません。これは永遠の保障を主張する者たち自身もよく承知している事実です。神は、すべての人が救われるために必要なことをすべて行われましたが、人間の自由意志を侵すことはされません。同じことは、救われた後の信者にも当てはまります。神は、私たちが信仰を保つために必要なすべてのものを与えてくださいます。聖霊の内住という最高の助けまでも含めてです。しかし、信仰にとどまり続けることは、忍耐と粘り強さ、そして毎日の決断——神を選び、この世を支配する悪魔に背を向ける決断——を必要とします。種まきのたとえがこれを明確に示しています。多くの人が御言葉を聞きますが、その中には受け入れない者もいます。ある者は、初めの試練で信仰を失います。ある者は、この世の心配や欲望によって少しずつ信仰を失います。しかし、日々の生活の中で雑草やいばらを乗り越えて信仰を保つ者だけが、最終的に神のために実を結びます。そしてペテロが言うように、「自分の召しと選びとを確かなものとする」([第二ペテロ 1 章 10 節](#))のです。

したがって、私たちはキリストにある信者として、確かに永遠の命という安全な立場にあります。しかしそれは、私たちが真実な信者として、信仰にとどまり続ける限りにおいてのことなのです。

忍耐について： 忍耐とは、最後まで耐え抜くことを意味します。キリスト者にとっての忍耐とは、どのような苦難の中でも、この地上の生涯の終わりまで信仰を保ち続けることを意味します。忍耐は決して容易なことではないことは事実です。聖書全体を通して、信仰が極めて厳しい試練にさらされる信者たちの姿を私たちは見ます。アブラハムが自らの子を犠牲として捧げるよう命じられたこと、ダニエルが獅子の洞穴に投げ込まれた

こと、ヨセフが牢獄に入れられたこと、そしてエレミヤが泥沼の穴に沈められたことなどは、信仰に大きな力を必要とした極限の状況の例です。このような苦境において、信者は過去の偉大な信仰者たちがそうであったように、ただ神の義と公正に全面的に依り頼むしかありません。私たちが苦難から解放される過程が、出エジプトの民が体験したように長く奇跡的なものであるにせよ、あるいは私たちの目にはそれほど劇的ではないにせよ、私たちは二つのことを確信することができます。第一に、この世に生きている限り、私たちの信仰は必ず試されるということ。第二に、神は私たちが直面するあらゆる事態に耐えられるよう、必ず備えをしてくださっているということです([第一コリント 10 章 13 節](#))。

出エジプトの時代にモーセとともに歩んだイスラエルの世代は、忍耐の必要性に関する重要な教訓を私たちに残しています。パウロが指摘するように、「彼らはみなモーセに属し、みな同じ霊的な食べ物を食べ、霊的な岩から飲みました……それにもかかわらず、神は彼らの大多数を喜ばれず、彼らは荒野で倒されました」([第一コリント 10 章 2～5 節](#))。この世代は最初は確かに神を信じました。家の門柱に小羊の血を塗り、死の使いを免れ([出エジプト記 12 章 13 節](#))、また「信仰によって」紅海を渡りました([ヘブル 11 章 29 節](#))。しかし、その初めの信仰にもかかわらず、また数々の奇跡を体験したにもかかわらず、彼らの信仰は長続きしませんでした。荒野をさまよう中で彼らは繰り返し神(とモーセ)を何度も試み、その結果、神はついに彼らの大半を滅ぼされました([ユダ 5 節](#))。

この出エジプトの世代の経験は、もう一つの観点からも重要です。終末の大難難期を通過することになる信者たちは、彼らと似たような経験をする必要になり、信仰を失って「気落ちする」ことのないように警戒する必要があります。[マタイ 24 章 13 節](#)におけるキリストの言葉は、その未来の時代を指して語られたものですが、同時に、私たち一人ひとりが「今ここで」経験している小さな患難にも当てはまります。その箇所ではイエスは、「最後まで耐え忍ぶ者が救われる」と語られました。その意味は、前に述べたとおりです。生涯の終わりまで信仰を保ち続ける者こそ、信仰者としてこの世を去り、良い地に蒔かれ、最後まで実を結び続ける植物となるのです。

信仰とは骨の折れる働きです。[第一テサロニケ 1 章 3 節](#)でパウロは、テサロニケの信徒たちの「信仰の働き」について語っています。これは、彼らが人生の試練や一見不公平に思える状況の中で信仰を保つために払っていた努力を指しています。自分たちの同胞から迫害を受けながら信仰を守ったテサロニケの信徒たちのように([第一テサロニケ 2 章 14 節](#))、忍耐はしばしば犠牲を伴うものです。しかし、まさにこの忍耐、すなわち信仰の忍耐と持続によって、将来の難難の時代に生きる信者たちは、最も困

難な試練の時から救われるのです([マタイ 24 章 13 節](#); [ルカ 21 章 19 節](#))。忍耐にはさまざまな形がありますが、ヘブル書の著者が明確に述べているように、私たちは皆、キリストを信じたときに出発した「不信仰の地」へ「戻る」可能性を常に持っています([ヘブル 11 章 15 節](#))。信仰を保ち、「忍耐」することによって、私たちはキリストを自分の救い主として受け入れたときの約束に誠実であり続け、キリストに対して忠実であり続けるのです。

一方で、その「不信仰の地」に「戻ること」は、多くの場合、欺かれる過程をたどることになります。信者をあからさまに誤った方向へ引き返させるやり口が明らかに示されることは、めったにありません。私たちの敵である悪魔は、それほど単純ではありません。むしろ、不信仰へと滑り落ちる坂は、往々にして巧妙に隠されています。そしてしばしば、その坂道は「個人的な罪」によって滑りやすくされているものです。以前の学びでも触れたように、私たちはこの罪深い本性を持つ肉体に住んでいる限り、個人的な罪から完全に自由になることは残念ながらありません。しかし、時折のつまずき(これも神の懲らしめから免れるものではありません)があっても、それに対して悔い改めと告白を伴うのであれば、それは神に対する反逆を意味するものではありません。けれども、悔い改めもなく、告白もなく、しかも自己正当化を伴うような、繰り返される頑なな罪の生活は、信者を神から疎外してしまいます。それは神の怒りと懲らしめを招くだけでなく、その人の神との関係をも損ない、信仰の衰退を加速させます。これこそが、出エジプトの世代に見られる光景です。彼らは最初こそ神を信じましたが、やがて神を疑い、神を非難し、神を裏切ることを習慣とするようになりました(詩編 78 篇参照)。彼らの行動は、まず神への信仰を失うことによって、神との関係を破壊してしまったのです。これこそが「背教(アポスタシア／ $\acute{\alpha}\pi\omicron\sigma\tau\alpha\sigma\acute{\iota}\alpha$ ／apostasia)」です。

罪と信仰は両立しません。私たちが罪を犯すとき、実際には、私たちの罪が満ちたそうとしている問題や必要を、神に委ねることを信賴していないことを示しています。霊的成長の正しい道を歩んでいる信者であれば、そのような過ちはすぐに悔い改め(自分の誤りを認め、拒むこと)と告白(祈りの中で自分の誤りを神に告げること)によって対処すべきです。神に反抗し、悔い改めることなく故意に罪を犯し続ける行為は、酸が金属を侵すように信仰を蝕みます。これが、パウロが「罪の報酬は死である」([ローマ 6 章 23 節](#))と言うときの本当の意味です。つまり、一つひとつの罪そのものが直ちに私たちを滅ぼすのではなく、むしろ罪の生活に完全に身を委ねることによって、信仰そのものが死んでしまうということです。そしてキリストへの信仰を失うならば、もはや裁きの日に私たちの身代わりとなってくださる方はいなくなります。したがって、もし私たちが信仰から「離れ去る(アフイステーミー／ $\acute{\alpha}\phi\acute{\iota}\sigma\tau\eta\mu\iota$ ／aphistēmi)」ならば、もはや神が私たちを「喜ばれる」([ヘブル 10 章 37-39 節](#))とは期待できません。ヤコブも同様

に、罪は完成に至ると(すなわち、生活習慣となったとき)、死を生み出すと言っています(ヤコブ 1 章 14-15 節)。ここで言われている「死」とは、霊的な意味での死、すなわち信仰の死です。この同じ理由から、パウロもまた私たちに対して、信仰に関して不信者に対して高慢にならないよう警告しています。なぜなら、不信仰のためにイスラエルが「切り取られた」ように、私たちも同じように不信仰に陥れば、同じ結果を招くからです([ローマ 11 章 20-26 節](#))。結局のところ、究極の問いは、私たちが自分の知っている真理に忠実であり続けるかどうかということです。使徒ヨハネが言うように、「私たちが聞いた真理が私たちのうちにとどまる限り」([第一ヨハネ 2 章 24 節](#))、私たちは自分の救いの確信を持つことができるのです。

心のかたくなさ: 神は人間の心、すなわち思いを、真理を受け入れることができるように造られました。人間として生まれた私たちは、神のことばを初めて聞いたとき、それを真理として認識できるという特権を与えられています。しかし、それを真実として受け入れるかどうかは別の問題です。実際、神の語られる現実と真実を拒むことは、人類の大多数にとって古くからの習慣です。神はご自身について、またその神性と性質についての真理をすべての人に明らかに示されましたが、それにもかかわらず、多くの人はこの真理を無視し、不信仰を選びます([ローマ 1 章 19-20 節](#))。自分が真実だと知っていることを拒むことは、聖書の観点から見ると破滅的な過ちです。その理由は、真理を拒むことと偽りを受け入れること、またはその逆、真理を受け入れることと偽りを拒むこと、この二つの命題は、神と悪の勢力との間にある宇宙的な戦いの中にいる人間にとって両立しないからです。私たちは皆、真理と偽りのどちらかを選ぶ自由を持ちながらも、完全にその圧力から免れることはできません。だからこそ、パウロは不信者についてこう言えるのです。彼らは神の神性を十分に理解していながら神を神としてあがめることをしないために、その思考はたちまち「愚か」になり、心、すなわち内なる命の器官が「暗くされた」と([ローマ 1 章 21 節](#))。[エペソ 4 章 18 節](#)でパウロは、真理を拒むことによって起こる心の鈍化の過程をさらに詳しく述べています。彼はエペソの信徒たちに、「虚しい思いの中を歩む」不信者のように歩まないように勧めています。不信者は「理解において暗くされ、神のいのちから遠ざけられている」のです。この悲惨な状態の原因は「心のかたくなさ」にあり、彼らは「感覚を失って」、その結果「食欲にあらゆる不潔な行いをするようになった」と述べています。

出エジプト記のパロは、の「心がかたくなになる」過程を示す最も典型的な事例です。これは、神の真理を拒み、その代わりに悪魔の偽りを受け入れることで生じる、神に対する精神的な鈍感さの結果です。神がモーセに予告されたように、モーセとアロンを通してなされた奇跡や、彼の頑なさによってエジプトに下された数々の災いにもかかわらず、パロは「自分の心のかたくなにし」、イスラエルの民を去らせるよう迫られているという明白な事実を拒み続けました([出エジプト 4 章 21 節](#), [7 章 13 節](#), [8 章 15 節](#))。これは、神の力を否定することと同じです。彼は神の圧倒的で否定できない力の現れに直面しながら、それを退けたのです。実際には、神はパロがかつてないほど

心をかたくなにすることをお許しになりました。パロは、理性を超えた否定的な態度を取り続けることを神に許されたのです。パロのこの大胆不敵さを思うと恐ろしくなりますが、それ以上に恐るべきことは、この人生において、イエス・キリストを通して示された神の救いの力と計画を拒む魂の存在です。救いの機会がこの世の生においてのみ与えられているのは、まさにそのためです。もし救われていない者が、神の栄光を直接見た後に悔い改めることを許されるなら、それは自由意志の公平な試練ではなくなってしまうでしょう。人の心が神を拒むほどにかたくなるのは、この人生のうちにおいてだけなのです。

背教(アポスタシア／ἀποστασία/apostasia)：しかし、ここで私たちが扱うのは、不信者が神を拒む理由やその結果ではなく、イエス・キリストへの信仰によって信者が得た救いが、どのように保持され、また失われる可能性があるかという問題です。前の文の最後の句が、実際には決定的に重要な部分です。すなわち、人が本当にキリストを信じている限り、その人は救われており、神の力と私たちの信仰によって保証された「最終的な救い」を確信をもって待ち望むことができます。信仰を損ない、むしろ、ついには死に至らせる仕組みは、制御されず、認められず、悔い改められない罪にあります。キリスト者らしくない行いを、ためらいも良心の痛みもなく続けることは、やがて信仰の生命そのものを蝕みます。しかし、問題の核心は罪そのものではなく、信仰です。自らの行いによって神から離れれば離れるほど、神に近づくことが難しくなります。やがて私たちは神のもとに行くことを完全にやめてしまいます。ついには神を拒み、否定し、見捨ててしまうのです。自分は決してそのようなことをするはずがないと事前に思っていたとしても、そのような事例は聖書に記録され、予告されています。そして私たちは皆、おそらくこれまでに、かつてキリストを告白していたのに、何らかの理由(たとえば人生に起こった悲劇を神のせいにしたなど)によって完全に神から背を向けてしまった人を知っているはずです。そのような人は、まるで信仰から墮落した結果、神と顔を合わせることに耐えられなくなってしまったかのようです([ヨハネ3章19-20節](#))。最終的に、そのような人の良心は破壊され、背教は完成します。

「背教(アポスタシア／ἀποστασία/apostasia)」という語は、神から離れ去る現象を指すために一般的に用いられる言葉です。これはギリシャ語であり、英語へ音写されたものです。文字どおりには「離れて立つこと」を意味し、古典ギリシャ文学では反逆や裏切りを表す言葉として広く使われていました。この語を聖書の著者たちが選んだのは、まさに適切であると言えます。というのも、世俗的な領域において反逆者や裏切り者と見なされるには、まず支配権力への忠誠を放棄し、それを拒む必要があるのと同じように、霊的な領域においても、背教は神とその権威を完全に拒絶することを意味するからです。これは、その人がもはや神の存在を信じていないということを意味するものではありません(墮落した御使いたちも「神を信じて」おり、しかし恐れおののい

ているのです([ヤコブ 2 章 19 節](#))。むしろそのような人は、神への信頼を捨て、神への忠誠を放棄したのです。

これら二つの考え —— 信仰の喪失と背教(アポスタシア／ $\alpha\pi\sigma\tau\alpha\sigma\iota\alpha$ ／apostasia) —— は、ヘブル書の著者によっても結びつけられています。彼は、聞き手に対して次のように警告しています。「あなたがたのうちに、不信仰によって生ける神から離れ去る、悪い心を持つ者が一人でもいないように」(ヘブル 3 章 12 節)。パウロもまた、かつての信者のことを、フィリピの信徒たちが見習うべき「模範」として自らを挙げる一方で、まったく反対の姿勢を取った者たちをきわめて厳しく描写しています。彼によれば、「彼らはキリストの十字架の敵として歩んでいる。その終わりは滅びである」([ピリピ 3 章 18-19 節](#))。教会史の中でもしばしばそうであったように、背教への傾向は上から —— すなわち権威ある立場にある者たち(すなわち「偽教師」) —— によって始まることが多いのです。「終わりの時」においては、多くの信者がそのような偽りの教えに引き寄せられ、その結果として、彼ら自身も教師たちと同じく「良心が焼き印を押された者」となってしまうとパウロは警告しています([第一テモテ 4 章 1-5 節](#); [第二ペテロ 2 章 1-3 節](#)参照)。さらに、良心の損なわれることと背教とのつながりも見過ごしてはなりません。パウロはこう述べています。「汚れた者と不信仰な者には、何一つ清いものはない。彼らの心と思いが汚れている」([テトス 1 章 15 節](#))。私たちが、正しいと知っていることを追い求め、それを自分の生活において実践しようと努力している限り、私たちは霊的に安全な状態にあります。しかし、悪の道を積極的に受け入れるならば、私たちの心の番人である良心を傷つけてしまいます。その道を進み続けることによって、ついには信仰なき生き方や行いに対して何の痛みも感じなくなるところにまで至るのです([エペソ 4 章 17-19 節](#)参照)。

救いの喪失(Loss of Salvation)： 主を最初に受け入れたすべての人が、最後まで主に忠実であり続けるわけではありません。とくに世の終わりの時には、初めは信仰を告白した多くの者たちが、岩地に落ちた種のように、かつて喜びをもって受け入れた信仰を捨ててしまうでしょう([ルカ 8 章 13 節](#))。主から完全に離れ去ることがもたらす悲劇の大きさを考えると、私たちはヘブル書の著者と共に言わざるを得ません。「このゆえに、私たちは聞いたことにいつそう注意を払い、流されてしまうことのないようにしなければならない」([ヘブル 2 章 1 節](#))。私たちが生きている物質的な世界は、「欲望をかき立て、人を滅びと破滅に沈める多くの愚かで有害な欲に陥らせる誘惑と罠」([第一テモテ 6 章 9 節](#))に満ちています。このような罪の繰り返しの行動パターンは良心を鈍らせ、信者を神から遠ざけてしまいます。罪を認め、それを告白することは清めと新たな力をもたらしますが、傲慢にも悪行をやめようとしない者にとって、回復は不可能です。ヘブル書の著者が指摘するように、「いったん離れ去った者を再び悔い改めに立ち帰ら

せることは不可能です。彼らは神の子を再び十字架につけ、公然と恥辱を与えているからです」(第一テモテ 6 章 9 節)。したがって問題は単なる罪ではなく、神に対する繰り返しの、持続的な不従順——すなわち自らの意志で信仰を完全に捨て去ること——です。これが背教を生み出します。そしてそのような背教者に定められた裁きは明白です(第一コリント 6 章 9-10 節;ガラテヤ 5 章 19-21 節;エペソ 5 章 3-7 節)。彼らにとっては、「むしろ初めから神を知らなかったほうがよかった」(第二ペテロ 2 章 21 節)のです。

天国と地獄、救いと滅びを分ける決定的な境界線は、個人の心における信仰(信じること)か不信仰(信じないこと)かという態度にあります。パウロの時代の不信仰なユダヤ人たちは、その不信仰によって神から離され、「命の木」から折り取られてしまいました。しかしパウロは異邦人の聞き手に忠告します。彼らが立っているのはその信仰によるのであり、その信仰が堅く保たれている限りにおいてのみ立ち続けることができるのです(ローマ 11 章 20-21 節)。このため、信じている私たちは十分に注意を払って歩む必要があります。自分の救いの状態に対して油断してはなりません。なぜなら、もし私たちが信じているなら確かに救われているのですが、気の緩んだ態度は出エジプトの子らと同じ危険に陥ることがあるからです(第一コリント 10 章 1-12 節)。彼らが約束の地に入ることができなかったのは、数々の奇跡を目撃したにもかかわらず、その心において信仰が不信仰に置き換えられてしまったからでした(ヘブル 3 章 18-19 節)。したがって、過去の肯定的な経験に頼ることはできません。私たちは「聖なる生活を追い求める」ことを続けなければなりません。なぜなら、「それなしには、だれも主を見ることができない」(ヘブル 12 章 14 節)からです。私たちが信じ続ける限り、神の言葉が私たちの心にとどまる限り、私たちは神のうちにとどまるのです(第一ヨハネ 2 章 24 節)。

神の条件(God's Conditions)：救いは神の側において条件づけられているものではないことを忘れてはなりません。神は「世を愛されたほどにそのひとり子をお与えになった」(ヨハネ 3 章 16 節)方であり、「すべての人が救われることを望んでおられる」(第一テモテ 2 章 4 節)方です。したがって、問題は神の側にあるものではありません。神はすでに御子を犠牲にし、すべての人に適用できる救いの計画を備えられたのです。それでもなお、永遠の状態に関してはいくつかの条件が存在します。それは、私たちが地上で生きている間、すなわち、永遠の身分が確定する以前の期間における私たちの行動を支配する条件です。使徒パウロは、私たちが「信仰にしっかりと根ざし、福音における希望から動かされないならば」(コロサイ 1 章 23 節)、傷のない者として御前に立つように定められていると述べています。また、「しっかりとそれ(福音)を保ち続けるならば」私たちは救われるのであり、「むなしく信じたのでなければ」と語っています(第一コリント 15 章 2 節)。私たちがキリストに属し続けるためには、初めの確信を終わら

でしっかりと保たなければなりません([ヘブル 3 章 6 節, 14 節](#))。しかし、「もし私たちが主を否むなら、主もまた私たちを否まれる」のです([第二テモテ 2 章 11-13 節](#); [マタイ 10 章 33 節](#); [ルカ 12 章 9 節](#))。

矯正の懲らしめ: 主が離れかけた者に矯正の懲らしめを与えられるのは、まさにその救いの喪失を防ぐためです。ヘブル書の著者は、この種の懲らしめの背後にある原則を示しています([ヘブル 12 章 9 節](#))。神の矯正的な懲らしめに対する私たちの応答に関して、彼は、私たちが地上の父の懲らしめには素直に従っていたことを指摘し、こう問いかけます。「それなら、なおさら霊の父に服従して生きるべきではないでしょうか」。神の正しい戒めを受け入れることの終着点は永遠のいのちです。しかし、うなじを固くして拒むことの終着点は死です。

たとえば、使徒パウロがコリントの教会の一員に下した、いささか厳しい宣言はこのことをよく示しています。その人はひどい罪に陥っていましたが、パウロは特別な使徒としての権能をもって、彼を「サタンに引き渡して肉が滅ぼされるようにした。それは彼の霊が主の日に救われるためである」と述べています([第一コリント 5 章 5 節](#))。つまりパウロは、この人を神の保護の外に置き、その結果として与えられる苦しみによって悔い改めを促し、最終的にその信仰を保つためにそうしたのです。同じ手紙の中でパウロは、聖餐の乱用に関連して、「私たちは主によって裁かれ、懲らしめを受けるのです。それは、この世と共に罪に定められないためです」と述べています([第一コリント 11 章 32 節](#))。なぜなら、「死に至る罪」というものが存在するからです([第一ヨハネ 5 章 16-17 節](#))。

賢い者への呼びかけ: 私たちの学びは、パウロの言う「罪の報いは死である」([ローマ 6 章 23 節](#); 同 [6 章 16 節](#); [6 章 21 節](#))という言葉を確認しましたが、ヘブル書の著者の言葉を借りればこうも言えます。「しかし、兄弟たちよ、あなたがたの場合には、これらのように話さねばならなかったとしても、私は救いに至るより良いことが真実であると確信しています」([ヘブル 6 章 9 節](#))。私たちが信仰、希望、神への愛を建て上げ続ける限り、ペテロが命じているように「ますます励んで、あなたがたの受けた召しと選びとを、確かなものにしてください。そうすれば、決してあやまちに陥ることはない」([第二ペテロ 1 章 10 節](#))。こうして「究極の救い」は確かに私たちのものとなり、主の日に、イエス・キリストにあって成長したすべての者とともに、義の冠を受けることになるのです。

[ペテロ #22「信仰の試練」に続く]